

日本産業衛生学会東海地方会

# 地方会ニュース

発行所 地方会ニュース編集事務局  
 〒 470-1192  
 愛知県豊明市杏掛町田楽ヶ窪 1-98  
 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生  
 電話 (0562) 93-2453  
 FAX (0562) 93-3079  
 発行責任者 井谷 徹

(題字 皿井 進筆)



正面からみた岐阜県立看護大学の風景  
 花のキャンパスに6月には蛍が飛び、食堂を一般開放して市民との交流をはかっている。



講座の看護教員 「働く人」対象のみでなく、臨床、地域でも教育・研究を行なっている。

## 岐阜県立看護大学の看護実践への貢献

奥井 幸子 (岐阜県立看護大学機能看護学講座)



本学は東海地方の公立看護大学としては最後発で、3月に1期生を送り出し、4月に大学院1期生を迎えた。

本学は、看護実践の改革・改善、およびそれを担う人材の生涯教育を建学の精神としている。

看護教員は、現場看護職と対等な関係のなかで共同研究を行ない現場を変えていくことが課せられ、これに対して県から特別研究費が給付される。

機能看護学講座の看護教員は8名は、「働く人」を対象とした2つの共同研究と、1つの科研による研究を行なっている。

共同研究の一つ目には、教授3名、助教授1名が参加している。まず、県内産業看護職の組織化から始まった。事業所や看護職の意向および実態を調査し、産業看護のめざす方向の模索と、実践能力の向上につながる研修会の開催など、活動の基本から地道に共同研究を続け、それを実践に活かすことをしている。

もう一つの共同研究は、某病院の看護部全体を対象に教授1名と

産業看護実践経験のある他講座の講師1名が参加している。職業や仕事が考慮されることが少なかった臨床看護に、これらが患者の健康や病気の回復に関連が深いことを理解し、看護実践にいかに取り入れていくかの共同研究を続けている。

科研による研究には、教授2名、助教授1名、助手1名、大学院生1名が参加している。産業現場から看護教育に転身して最も印象深かったのは、「働く人」としての看護職の過酷な労働であった。上記と別の病院看護部全体と、ゆとりを創って、しかもよりよい看護を実践することをめざした研究を2年前の4月から始めた。看護部長から師長・副師長に教員を加えた十数名で、めざす看護、めざす看護師像を明確にし、それに向けて看護を再編成し、ゆとりを生み出すための検討を重ねている。ゆとりを自覚する余裕もなかったもので、ゆとりとは何か、その効用に対して意見やアイデアが出るまでには時間がかかった。さらに、師長・副師長への研修・卒業6年目のリーダー層への研修・看護部全体へのこのプロジェクトの意義に関する研修などを行ってきた。これこそ究極の産業保健・看護の第一次予防活動であると思っている。

## 特集

## 平成16年度 日本産業衛生学会 東海地方会 総会並びに研修会

## はじめに

企画運営委員代表 木下 勝也

本年度の研修会は、三重県が担当となり三重産業医会が企画運営して6月25日に四日市市「じばさん三重」で開催致しました。当日は生憎の梅雨空でしたが、71名の参加があり終始活発な意見交換が行われました。今回も午前は、近年グローバル化した産業衛生活動において重要なテーマである特別講演を1題、午後は三重方式と云われるワークショップ2題を2会場に分かれて同時開催致しました。特に、日常の産業保健活動に直結したテーマのワークショップにおいては、グループ討議の時間もあり全員参加型の活気に満ちた研修会になりました。最後に、当日ご参加頂いた皆様及び研修会開催のためにご支援・ご協力頂いた各方面の方々に感謝申し上げます。

## プログラム

日 時：平成16年6月25日(金) 10:00~16:00

場 所：三重北勢地域地場産業振興センター「じばさん三重」

10:00-10:10 開会挨拶

地方会長 井谷 徹

企画運営委員代表 木下勝也

10:10-11:40 特別講演

「概念の整理～リスクとハザード～」

井谷 徹 (名市大・院・医・労働・生活・環境保健学)

座 長 坂本 弘 (三重大学名誉教授)

11:40-12:20 日本産業衛生学会東海地方会総会

13:30-16:00 ワークショップ I

「産業医と外部医療資源との連携～健康情報共有のための書式の検討」

講 師 小西泰元 (三菱化学)

座 長 滝川 寛 (三重産業保健推進センター相談員)

事例報告 尾辻典子 (本田技研)

松田 元 (松下電工)

13:30-16:00 ワークショップ II

「産業看護職は産業医の代役か？」

講 師 川出鈴代 (日本トランスシティ健康保険組合)

座 長 杉浦静子 (三重産業保健推進センター相談員)

指定発言 2名

## 特別講演

「概念の整理～リスクとハザード～」を聴いて



尾辻 典子

(本田技研工業(株)鈴鹿製作所健康管理センター)

ハザードとは危険の源：製造や使用、処分過程で、その量に応じて生体や環境に不都合な影響を与える物質や工程などが持つ固有の特性、物が持つ毒性の大きさを言い、リスクとはある特定の状況で(現実の具体的状況下で)物理化学的要因に暴露することにより生

じる危害の可能性、危害発生の予測頻度を言う。ISO/TS20646-1での用語の定義としてはハザードは危害の潜在的な原因を言い、リスクとは危害の発生確率と危害の重大さの組合せを言うとのことである。

現在労働現場においては自主性を重視した作業改善の考え方がとり入れられており、使用者・労働者の自主性を重視し、そのなかでまずハザードの特定を行いハザードに対する作業条件中のリスクの点検を実施し対応可能なハイリスクに対し実効性を重視し生産性向上を考慮して改善策を指向、改善を実施後その活動について点検、修正を行って効果についての評価をし、より良い方向につなげていくという方法が推奨されている。

井谷先生が議長をされているISOの委員会で出されている筋骨格系疾患予防策、職場の腰痛・肩こり予防マニュアルにも自主対応型の改善手法がとりいれられ、ハザード同定のチェック項目として作業時間と密度、作業形態、姿勢と動作、労働空間と物運搬の特徴、構内が挙げられており、チェックリストに基づいて使用者・労働者がチェックを行い、発生が予測される健康障害の重大性、健康障害を被る可能性のある労働者の数、改善によるリスク軽減効果の大きさ、改善策の実行可能性等を考慮して作業改善の優先順位を決定し対策を講じていく方法が提唱されている。

リスクマネジメントの概念に基づいた活動として、1)現場の実態把握を重視 2)問題の重要性評価を重視(+実効性重視) 3)健康障害発生予測段階での対策を重視(1次予防) 4)〈専門家の支援を受けた現場主体の活動〉が重要である。今回の講演によって我々産業保健に携わる者は専門家としてサポートをするというスタンスで現場の作業者と協働して実践実行できる作業改善に取り組んでいくべきであるという認識を再確認することができた。またそのためには日々新しい情報のキャッチを心がけ、また日頃から現場の方とのコミュニケーションが必要であるということも改めて痛感した。



井谷 徹先生

## ワークショップ

ワークショップ I

「産業医と外部医療資源との連携  
～健康情報共有のための書式の検討」を聴いて

飯田 和子 (松下電工瀬戸工場)

ワークショップ Iは座長：滝川 寛先生、講師：小西泰元先生と指定発言の尾辻典子先生、松田 元先生により事例紹介を交えた発表がなされ、その後、グループディスカッションが行

われた。

小西先生は、産業医と臨床主治医との間に依頼書及び提供書が必要であるという結論に至った経緯から順にお話し頂き、依頼書、提供書の初版から最終版までをお話し頂き、なぜ最終版に到着したかについて分かりやすくお話しされた。

次の尾辻先生は、ホンダ技研における健康管理マニュアルとその際の診療情報提供書の活用方法について紹介された。

最後に松田先生から、実際の産業医活動の中から苦慮された事例と健康情報共有により職場復帰に成功した事例を紹介頂いた。

引き続き行われたグループディスカッションでは、それぞれのグループで日頃感じている問題点等について率直に討議され、最終的にまとめられ、グループごとに発表が行なわれた。

その中では、診療情報提供依頼書、診療情報提供書最終版については完成度が高く、三重県以外の産業医からも使用したいとの声が高かった。しかし、問題点としては、①本人の同意がとれない場合はどうするのか、②事業場側から安全衛生委員会等で情報提供書の開示を強く求められた場合の守秘義務と安全配慮義務の兼ね合い、③文書料の負担について、④産業医未選任の小規模事業所等における対処等の現在考えられる事項がそれぞれのグループから出され、全体でのディスカッションと併せて座長からの提案も出された。

結論としては、①きちんと本人に説明し同意を得よう努める、②情報提供書は産業医の判断結果のみが出されるようにし、その際本人への確認を取っておく、③文書料は将来的には会社側に出して貰えるよう提案していくことも必要、④産業医共同選任事業の活用という意見にまとめられた。私見ながら④に対し地域産業保健センターへの依頼も有効のように思われる。

また、最終版には情報提供への返信が付けられている点について、産業医と臨床主治医との連携がこれによりいつそう強くなると思われる、臨床主治医への就業上の措置に対する理解が深まるのではないかな等の肯定的な意見が主流であった。

普段から身近に感じられる「産業医と外部医療資源との連携」という視点でのワークショップであり、それに加え、それぞれの企業内での温度差が出やすい復職時の就業配慮という重い問題を含んだものであったが、様々な場所で活躍されている先生方のご意見を聞く事ができ、非常に有意義な会であった。



小西 泰元先生



川出 鈴代先生



ワークショップ I



ワークショップ II

## ワークショップ II

### 「産業看護職は産業医の代役か？」



和田 晴美 (国際セントラルクリニック)

「産業看護職は産業医の代役か？」のテーマで、三重産業保健推進センター相談員・日赤豊田看護大学 杉浦静子専攻科教授の座長のもと開催された。

主題説明の後、日本トランスシティ (株) 川出鈴代保健師と東芝中川祐子保健師から話題提供がされた。

その中で産業保健はチームで活動するものであるか産業看護職の姿勢として産業医とは一味違ったアプローチをするのか？産業医と等質のアプローチをするのか？従来の医療者主導型保健指導から来談者主導型健康相談アプローチを進める上での問題点として、対象者の人間理解の難しさ、行動変容の自助力への支援活動等の技術不足の問題提起がされた。その後2グループに分かれて、このテーマでの産業医が専属か嘱託かによって、業務にかなりの差異がみられる。産業医は管理者として権利をふるいチームリーダとしてふるまうことが必要である。また産業看護職は労働者の一番身近な専門職の産業保健支援者として活躍し、指示待ち型ではいけない等々活発なディスカッションが行われた。

最後に坂本弘三重大学名誉教授よりまとめのコメントとして次のような助言を頂いた。

産業看護職は産業医の代役として活躍するのではなく、産業医とは一味違う保健指導等の業務ができなくてはならない。それには以下のところにポイントを置いた活動が必要とされる。

※労働者からよい評価をされるような看護職でなくてはならない。  
※産業医の通訳機能をもっていること。(労働者のバックグラウンドを提示できるか)

※労働者の方に向ってのアプローチをする (方法はよいか・道筋はとおっているか・来談者の参加はできているか)

※行動変容の到達目標を実現可能な範囲にもっていく (やる気・可能性を配慮・理想を迫わない等)

※喜びを分かち合う

※労働者間の口コミの有効性も重視する必要がある

以上盛会裡に終える事が出来た。

## 新任の挨拶

「地域社会や医療現場で信頼される薬剤師」  
づくりをめざして

吉田 勉

(名城大学薬学部臨床医学研究室)

平成16年4月1日より、新たに創設された臨床医学研究室に着任致しました。すでに平成15年度から藤田保健衛生大学に名城大学のサテライトルームができ、修士課程の学生たちが臨床薬剤師をめざして病院での実習や臨床講義などが始まっていました。今後は、従来からの産業医学分野における「じん肺」「慢性ベリリウム症」などの研究を継続するとともに、新たなテーマとして「地域社会や医療現場で信頼される薬剤師」づくりの実践を始めました。

藤田学園では医師、看護師、保健師、臨床検査技師、診療放射線技師、作業療法士、理学療法士、診療情報管理士などの教育に多少なりとも係ってきました。しかし、薬剤師の教育は初めての経験であり、これまでの医師やコメディカルスタッフ育成の教育経験が生かせるのかどうか不安でもありました。幸いに名城大学には既に藤田学園から2名の先生が着任され、臨床講義やPBLなどの骨格ができており、比較的スムーズに講義などを開始することができました。

さて、薬学部をめぐる客観的状況は、①薬剤師に対する社会的ニーズとして「医療や科学の進展に対応できる高い資質を有する薬剤師を育成するために、薬学での薬剤師育成教育を充実・改善させることが必要です。それには、薬剤師受験資格を得ようとする薬学生に対し、病院および薬局での臨場感ある実務実習の学習が教育上不可欠です(実務実習モデルコアカリキュラム策定に関する小委員会報告 平成15年2月より)。」として、従来以上に臨床重視の薬剤師教育の実践が求められています。②ほぼ1年前から始まった、薬学部新設や既存薬学部の定員増(全国的には平成16年度だけでも合計1840名の入学定員増となっており、今後1~2年の間に10~20近くの大学で薬学部の新・増設が計画されている)③平成18年度からの薬学部6年制への移行とそれに伴う臨床薬剤師養成にむけたカリキュラムの編成、実習病院や臨床経験豊かな教員の確保。④薬剤師の現役国家試験合格率100%を目指すことなど、なんだか藤田学園在職中と同じようなことまでもが急務の一つに挙げられてきています。さらに、来年度には愛知学院と金城学園に薬学部が新設される予定であり、いよいよこの地方でも薬学部間の競争が意識され始めています。幸いに、名城大学薬学部は設立されて約50年となる歴史と伝統のある学部であり、多数の卒業生がこの地方を始めとして多くの地域で活躍しています。この方々の協力を得ながら、さらに藤田学園で多くの先生やコメディカルスタッフの方々に教育や研究上で支えられてきた経験を生かして、チーム医療の一員として信頼される薬剤師を育成するために、旧弊に陥らず、戸惑わず、躊躇せず取り組んでいければと考えています。

なお、この1年間にわたり故島 正吾先生の膨大なスライドや胸部X線写真の整理を行ってきました。かなり古い作業現場の写真もあり、私どもでは良く判らないものも多くあります。近いうちに先生方のお恵をお借りすることになると存じます。その節は直しくご指導賜りますようお願いいたします。

東海コープ事業連合  
商品安全検査センター長就任報告

齋藤 勲

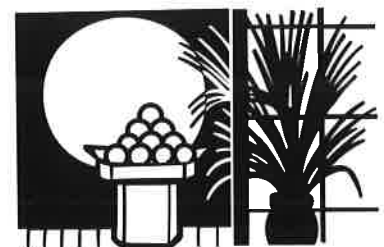
(東海コープ事業連合商品安全検査センター)

本年3月末をもって、30年間勤務しました愛知県衛生研究所を退職し、4月から商品安全検査センターに勤務することになりました。職員7名、パートさん4名のこぢんまりした組織ですが、微生物検査は年間13000件、残留農薬検査は900件弱、その他添加物、動物用医薬品、GMO検査等々の検査や同時にいろいろな学習会なども開催しながら皆さん和気藹々と仕事をしています。秋からは金属分析(米中カドミウム、魚中水銀、ヒ素など)も開始します。

衛研時代は、食品中残留農薬、PCBs、フタル酸エステル類、カビ毒、重金属、添加物など理化学検査の大部分を担当することが出来本当に貴重な経験でした。消費者の中で食の安全・安心への関心が高まる中、衛研での経験を活かして食品中汚染物、有害物の現状を時間の系列の中できちんと理解し、問題点を整理し冷静且つ効率的に対処していくあり方を生協のこの場を借りて出せたらと思ひ決めました。

産業衛生学とのつながりは、名大衛生学教室で井上・竹内両教授の下、久永直見先生や五藤雅博先生らと業務とは直接関連はありませんが、二束のわらじで楽しく研究生生活をさせていただきました。衛生害虫・シロアリ防除用有機リン系農薬及びクワロデンの暴露測定及び尿中・血中代謝物測定による暴露評価/ヘキサノール・トルエン尿中代謝物によるバイオロジカルモニタリングを用いた健康影響に関する研究は、私の生き方に一つのはっきりした方向を与えてくれました。人の健康を基本に化学物質・有害物質を見るという微量分析の根源的な意味を教えてくださいました。その視点が今の自分を支えてくれていると思っています。

産業衛生の分野は裾野が広く、いろいろな経験の方が参集して見えますが、化学物質と健康影響というテーマは未来永劫無くなるものではなく、所を変え品を変え絶えず現れてきます。また、現代のように機器分析が発達して従来では見えなかった現象が解明できる分野も増えています。現在、名大医学部保健学科では有機リン剤等の微量尿中代謝物のGC/MSによる測定が可能となり、国内でも子供を含む一般人での暴露実態を把握できる時代となっています。公衆衛生的にも重要な分野であり、これからも技術的な指導を含め協力していきたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。



## シリーズ 産業衛生に携わって

## 「若輩産業医の悩みのタネ」



高村 淳 (トヨタ自動車衣浦工場)

東海地方会の皆様こんにちは。トヨタ自動車(株)衣浦工場で産業医を務めております高村と申します。多方面に活躍される先生方とは異なり、経験の少ない若輩者ですが悩みだけは多いように感じております。今回、投稿の機会を与えていただきましたので、少々愚痴っぽいのですが現在の悩みのタネについて書いてみたいと思います。

現在の大きな悩みのタネは2つあります。まず第1に多残業に対する対応です。公には何時間ですか、何人くらいですか具体的な数字は申し上げられませんが、かなりの人数の方がかなりの時間で残業されています。時間だけをみますと、こんなに勤務されているのかと感ずることもあります。産業医としては残業禁止を命じざるを得なくなってくる範囲です。ですが、仕事が終わらないのに残業なしで帰られることをストレスに感じる方もみえます。“多残業健診でも異常がないのに、どうして制限されるのか”とおっしゃる方もいらっしゃいます。体のことを思っただけの対応は思うものの、自分が働く側の立場であれば、納得いかないようにも思います。見方を変えた場合、会社にとって仕事の停滞は不利益にもなります。健康面を取るか、精神面を取るか、はたまた会社の利益を考えるかジレンマに陥るばかりです。

第2としては、期間従業員の方々による種々の問題です。現在会社全体として4000人程度の方が期間従業員として勤務されています。私が担当する衣浦工場は全工場なかでも最も多い1000人程度の方が勤務されています。生産工場で働くような方々ですので、まず健康な方がほとんどです。しかし、これだけの規模にもなると問題のある方がポツリポツリと出てきます。私が担当しているこの3年間だけでも数え切れないほどありました。てんかんの既往を隠して応募した結果、作業中に発作を起こして倒れた人。異常な痩せ方をしているのでどこかに異常がありそうなのに、これまで検査を受けていなかった人。たまったお金と休暇で海外に行つて食あたりをおこして帰ってきた人などなど、さまざまです。このような人は多くありませんが、日ごろの作業に関しても、作業不慣れからくる上肢痛、皮膚炎などが数多く見られております。一方正社員の方はこのところ大きな問題を起さされる方がないため、期間従業員専用産業医かと勘違いしてしまうくらい有り様です。会社方針ですので個人的に増減できるものではありませんが、なんとかならないものかと感じています。

とるに足らないような悩みで申し訳ありませんが、以上私の悩みです。残業問題で困ったときや、期間従業員の方が難題を運んでくれたときには読者の先生方におすがりすることもあるかもしれませんが、その節はよろしくお願ひ申し上げます。

## 「共通言語～カラダはクルマ!?～」



向井 理夏 (本田技研鈴鹿)

「ああ、まただよ」アナムネーゼをとりながらいつものお決まり文句を書く。「〇年前より健診にて異常指摘されるもそのまま放置。〇ヶ月前より自覚症状出現し、近医受診。〇〇との

診断を受け、紹介入院となる。」病院勤務時代の私はこの様な文章を何度となく書き、いかに自分の健康状態に無関心な人の多い事か、健診している意味がないのではないかと常々感じていた。この高齢化社会において病気になる前の予防・健康増進にもっと取り組まなければ!という危機感と正義感(?)を持って成人期対象の産業保健の分野に足を踏み入れた。

医療畑から飛び込んだ企業の世界。入社当時の私が持っていた我が社のイメージとしては、①車・バイクを作っている ②F1チーム ③ASIMO ④8時間耐久レース この程度であった。この会社の従業員とのコミュニケーションというものを考え、従業員との共通言語探しをすることにした。話を聞くと従業員はやはり車・バイクに興味があつて入社したようだ。元々車には興味があつたが構造となるとちんぷんかんぷんである。そんな私に従業員は難しい話を分かりやすく説明して下さる。皆さん自分の得意分野とあつて目を輝かせている。そのおかげで車についていくらか理解できるようになってきた。そこで健康状態を車に置き換えて説明してみる。するとボンと膝をたたき納得していただけた。これに味を占めてしまい、もういいよといわれてしまいそうなくらい多用している。

こうして実際に業務の中で従業員の方と接していくうちに、健診で指摘されていたならここまで悪化するまでに何らかの手を打てたのではないかという思いは医療者としての意見であり、自覚症状がないから自分は健康だと思っている人が多いという認識のズレを痛感した。

WHOの定義によれば健康とは精神的及び肉体的、また社会的にも適応している状態を言うことと定義している。高齢化社会といわれるこの現代社会において健康は絶対的な物差しで計るのではなく、相対的なものとして捕らえ、生きる事の目標との調和において築かれるものであり、それゆえ生活習慣と健康の関連性が問われてくるのではないかと思う。

そのため、病气探しではなく、生活習慣の見直しをし、QOLを高く保った状態を維持し、生き生きと仕事ができるように援助することが必要であると考えます。

話 題

書 評

「GHS国連勧告」



久永 直見

(産医研・国際研究交流情報センター)

近年、産業化学物質の管理に関し、国際的動きが急である。例えば、(1)PRTR (Pollutant Release and Transfer Register、環境汚染物質の排出・移動登録) 制度、(2)GHS (Globally Harmonized System of Classification and Labelling of Chemicals、化学品の分類および表示に関する世界調和システム) 国連勧告、(3)EUが域内に2005年から導入しようとするREACH (Registration Evaluation and Authorization of Chemicals、化学品の登録・評価・認可) システム (ヒトに対して発がん性・変異原性・生殖毒性があるまたはその可能性が高い物質約1,400種の製造・輸入・使用の事前許可制等を規定) などがある。

こうした動きの中で、政府と企業はそれぞれのレベルでの新たな対応を求められている。厚生労働省安全衛生部では、2004年4月に、化学物質調査課が化学物質対策課に改組され、化学物質評価室が新設されたが、これも国の対応の一つである。

こうした動きの中で、政府と企業はそれぞれのレベルでの新たな対応を求められている。厚生労働省安全衛生部では、2004年4月に、化学物質調査課が化学物質対策課に改組され、化学物質評価室が新設されたが、これも国の対応の一つである。

上述の動きのうちGHS国連勧告(2003年7月)の要点は以下のとおりである。

- (1) GHSの目的は、化学品を危険有害性に応じて分類するための基準、表示および化学物質等安全データシートの項目等の世界的統一・調和。
- (2) 医薬品、食品添加物、化粧品、食物中残留駆除剤はラベル表示の対象外だが、労働者への曝露の可能性がある場合等には適用。
- (3) GHSが対象とする危険有害性の種類は、急性毒性、感受性、生殖細胞変異原性、発がん性、生殖毒性、特定標的臓器毒性など約30項目。
- (4) ラベルに必要な情報は、注意喚起語、危険有害毒性情報、注意書きと絵文字、製品の特定名、供給者の特定。
- (5) 化学物質等安全データシートには、危険有害性、組成、環境影響など16項目を示す。

日本の安衛法は、化学物質の危険性と有害性の両方を対象とするが、同法に基づく表示および化学物質等安全データシートの交付制度は有害性のみが対象であること、絵文字表示の規定がないこと等について、今後、GHS勧告との整合が必要である。

GHSの詳細が必要な方は、下記ウェブサイトをみるか、厚生労働省のホームページでGHSをキーワードに検索して国連勧告仮訳をお読み頂きたい。

<http://www.unece.org/trans/danger/danger.htm>

GHSは、APEC域内では2006年末までの実施とされている。GHSを初めとする新たな化学物質管理方式への企業の対応に際しては、化学物質の危険有害性に関する知識や経験が不可欠である。多くの東海地方会員の皆様が、企業内の専門家として大きく寄与されることを期待したい。



「手腕振動障害—その疫学・病態から予防まで」

山田信也 二塚 信 編著

前田節雄 榊原久孝 原田規章 著

財団法人 労働科学研究所出版部 発行(労働科学叢書111)

2004年4月5日

松本 忠雄 (津島保健所)

イタリアのロリガが1911年に削岩機やチップングハンマー使用による振動障害とその予防対策を論文で報告してから、あと数年で1世紀過ぎるが、その後振動障害の医学的探索、診断・治療・予防対策の研究はどのように進んだか。障害者の社会的復帰は可能となったであろうか。著者らはこのように問題提起して、自らの実践と、それを土台とした国際交流から得た各国の経験や、手腕振動の評価などの国際的な共同作業について詳細な著述がなされている。

本書は、8章からなるが、「第1章 振動障害の概念」のほかの各章は分担で執筆している。「第2章 振動障害発生の歴史的経過」は二塚 信氏が担当。振動工具の歴史と20世紀のわが国における健康障害の発生と予防および研究の国際的取組みの経過について記されている。「第3章 手腕振動の評価」は工学者の前田節雄氏が担当。手腕振動の測定法とその評価、許容基準、および防振手袋などについて、JIS、ISOの動向を含め詳細に記述している。「第4章 振動障害の疫学」は、二塚信氏が担当。産業衛生学会振動障害委員会の調査結果、同学会の手腕振動の許容基準設定の根拠のほか、九州の国有林のチェーンソー作業者の長期追跡研究、パプアニューギニアやインドネシアの熱帯雨林でのチェーンソー作業者の病態などを記している。「第5章 振動障害の病態」は榊原久孝氏が担当。末梢循環、末梢神経、筋骨格系の各障害のほか、下肢症状や難聴と振動障害の関係についても述べている。著者は1998年にも振動障害の病態について総説を執筆した。「第6章 振動障害の診断」は原田規章氏が担当。1960年代から1970年代にかけてわが国の振動障害診断の総合的な体系が確立したが、いまだに末梢機能検査の判定基準については、確立していないことを指摘している。各国の研究の動向と並んで、ISOに見られるように、検査方法の国際標準化の動きがあることについても述べている。「第7章 振動障害の予防」及び「第8章 振動障害者の社会復帰」は山田信也氏が担当。詳細な歴史的背景とともに、著者が今日まで約40年間にわたって診断治療と並んで予防対策の体系を確立させてきた、国有林モデルについて述べている。また著者は、1983年1月の産業医学雑誌巻頭言に「振動障害対策としての社会復帰計画」を執筆している。

著者らは、「私達自身の小作品がロリガやハミルトンが切り開いた世紀の、次なる世紀への発展のなんらかの踏み石になれるならば、幸いである。」と本書の結びで述べている。20世紀後半に代表的な研究者として取り組んだ研究と社会的実践をこのような形で総括的に著述されたことはきわめて意義深いことだと思う。振動障害の研究者はもとより、産業医や衛生管理者は是非一読をお勧めしたい。



### これからの諸行事予定

#### 1) 産業保健科学セミナー(1)

日 程：2004年9月15日(水) 15:00~16:30

会 場：明倫ホール

(名古屋市中区新栄2-4-3 明倫ビル6F、地下

鉄「新栄駅」2番出口徒歩3分)

テーマ：「睡眠時無呼吸症候群と職場の健康管理」

演 者：塩見 利明先生(愛知医科大学 睡眠医療センター部長)

資料代：500円

#### 2) 東海地方会関連学会・研究会

##### ①平成16年度東海地方会学会

日 程：2004年11月27日(土)

会 場：あざれあ(静岡県男女共同参画センター、静岡市)

会 長：斎藤 俊二(東海健診センター)

内 容：

午前 一般演題

午後 特別講演「産業医学における神経・行動影響とその評価法」

横山和仁(三重大・医・公衆衛生)

シンポジウム「職場復帰をどう進めるか～企業の現状と今後の展望～」

1. 「職場復帰支援モデル事業について」

田中 克俊(北里大・医・産業精神保健学)

2. 「職場復帰支援システムについて」

住吉 健一(旭化成富士支社)

3. 「当社の職場復帰の進め方」

伊藤 雅代(キャノン)

### 中小企業安全衛生研究会 第38回全国集会

日 時：平成16年11月12日(月) 13:00~16:30

場 所：名古屋大学医学部鶴友会館

特別講演：「中小企業の安全衛生を創る」からみた研究会からの提言(案)

平田 衛(独立行政法人 産業医学総合研究所)

2002年に当研究会の編著として出版された「中小企業の安全衛生を創る」の内容を踏まえ、研究会からの提言を試みます。

シンポジウム「中小企業安全衛生のネットワーク」

シンポジスト

経営者の立場から 加藤明彦(エイベックス(株)社長)

労働者の立場から 岡下牧生(愛知製鋼労働組合)

企業外労働衛生機関の立場から

武藤繁貴(聖隷健診センター)

産業看護職の立場から 岩井咲子(高砂香料工業)

今回はこの地方の中小企業の経営者、労働者で安全衛生活動に熱心に取り組まれている方々に日頃の活動の様子とどのような組織的なつながりを生かしているかなどについてお話しいただき、

我々産業保健スタッフの側がどのようにアプローチし、援助できるのかなどについて考えます。

一般演題募集中

今回の研究会は国際シンポジウム「中小企業およびインフォーマルセクタにおける産業保健」の第1日目にあたり、本研究会終了後、名古屋国際会議場でインフォーマル・ウェルカムパーティーが始まります。国際シンポジウムに参加される方はぜひ本研究会参加もご予定ください。また、本研究会のみの参加も大歓迎いたします。

事務局：〒480-1195

愛知郡長久手町岩作

愛知医科大学医学部衛生学講座

柴田英治

E-Mail：eshibata@aichi-med-u.ac.jp

T E L：0561-62-3311(内線.2370)

F A X：0561-63-8552

### 国際シンポジウム

#### 「中小企業およびインフォーマルセクタにおける産業保健」

1. 日 時：2004年11月12日(金)~15日(月)

2. 会 場：名古屋国際会議場

3. 参加費：35,000円

(懇親会費含む。12日の京都ツアーは別途8,000円)

国際シンポジウム「中小企業およびインフォーマルセクタにおける産業保健」を井谷 徹組織委員長(東海地方会長)のもとに、今秋、11月12(金)から15日(月)まで上記のように名古屋国際会議場において開催します。本シンポは、国際労働衛生学会(ICOH)科学委員会の1つである「中小企業およびインフォーマルセクタの産業保健」科学委員会(W-O Phoon委員長)が主催するものであり、この科学委員会としては初めての国際シンポです。

中小企業およびインフォーマルセクタは、世界のいずれの国においても、企業数や労働者数の過半を占めており、経済発展の側面でも、労働力のバッファーという側面においても、社会的に重要な役割を果たしています。これらの小規模事業場に働く人々の健康状態を改善することが、すべての労働者の「労働生活の質(QWL)」を向上するうえで不可欠といえます。

これまでに、多くの研究が、中小企業およびインフォーマルセクタの作業関連疾患や労働災害リスクの高さを指摘しています。しかし、経済的、技術的あるいは経営的な困難さにもかかわらず、これらの小規模事業場の経営者、労働者は、職場の安全衛生状態を改善するために様々な努力をしており、成功例も多数みられます。

今回のシンポでは、「小規模職場の成功事例に学ぶ」をメインテーマとし、世界各地の中小・零細企業や種々の小規模職場で推進されている産業保健問題に対する成功例を検証しようと思えます。世界中の産業保健従事者・研究者とともに、成功の背景や成功事例の他への応用などを協働して考え、これからの中小企業・インフォーマルセクタにおける産業保健戦略を立てようという狙いで開催するものです。

東海地方会の先生方にも、是非ご参加いただき、世界各国の産業保健従事者・研究者と一緒に、中小企業・インフォーマルセクタの産業保健の向上にむけた討議に加わっていただきますようご案内申し上げます。(文責：城 憲秀、名市大・院・医 労働・生活・環境保健学)

ホームページ：[http://ohse2004.umin.jp/index\\_j.html](http://ohse2004.umin.jp/index_j.html)

②第62回職場ストレス研究会

日 程：2004年10月20日（水）

会 場：明倫ホール

（名古屋市中区新栄2-4-3 明倫ビル6F、地下鉄「新栄駅」2番出口徒歩3分）

テーマ：「メンタル不全を生む職場環境への対応－産業保健スタッフの役割－」

演 者：河野 慶三先生（富士ゼロックス 全社産業医）

資料代：500円

③第46回産業精神衛生研究会

（第63回職場ストレス研究会と合同開催）

日 程：2005年1月28日（金） 9：30～14：30

場 所：愛知中小企業センター

共 催：産業精神衛生研究会、愛知産業保健推進センター、愛知労働局

参加費：無料

プログラム（詳細検討中）：

午前の部

- 基調講演 9：30～10：15
- 一般演題（5題程度） 10：15～11：15
- ワークショップ 11：15～12：15

午後の部

- 特別講演 13：35～14：25
- シンポジウム 14：30～16：30

「メンタルヘルス不全者の復職について」

三重①沢崎健太（鈴鹿医療科学大）②鈴木まき（三重県南勢志摩保健福祉部）

退 会

愛知①赤城ゆかり（日清紡績）②伊藤秀記（心身障害者コロニー発達障害研究所）③伊藤光世（ソニーイーエムシーエス）④稲熊 裕（心身障害者コロニー発達障害研究所）⑤小倉幸夫⑥落合昭博⑦加藤兼房（心身障害者コロニー発達障害研究所）⑧金谷史子⑨神谷香一郎（エルモ）⑩竹田泰史（名古屋大学）⑪田中雅子⑫丁 訓誠（上海市計測生育研究所）⑬中野 功（名古屋大学）⑭横沢敏也（ノリタケカンパニーリミテド）⑮李 衛華（名古屋大学）⑯梁 冰（名古屋大学）⑰児玉欣也（こだま内科クリニック）⑱岡部えり子 静岡①若宮俊司②大野尚之（アスモ）③土屋きわ子（本田技研工業）④後藤 猛 三重①大鷹順子（三菱化学） 岐阜①仙石義寛②太田英規

転 出

愛知①近藤一秀（東北地方会へ）②渋谷基子（関東地方会へ）③田原裕之（九州地方会へ）④松葉 斉（関東地方会へ）⑤柳堀朗子（関東地方会へ）⑥廣部高明（九州地方会へ） 静岡①福田弘子（近畿地方会へ） 三重①宮本健史（中国地方会へ） 岐阜①玉置嘉輝（中国地方会へ）

編集後記

今年は猛暑になるといわれている。「熱中症で病院に運ばれる人が相次いでいる」という記事が、新聞紙上をにぎわしている。先日、突貫工事を行っている長久手の万博会場を視察した。9月末日までに外観工事を仕上げるという。地元の人間として、万博の成功は大いに期待するが、その為に尊い健康を損なうというのはいただけない。開幕まで労災事故が起らないことを祈りたい。

本号も、お忙しい先生方から御玉稿をいただいた。これらのご協力で、本ニュースは62号を迎えることができた。今後も引き続きご協力賜り、100号、200号を迎えたいものである。

（五藤雅博）

次 回 発 行 平成17年1月1日

編 集 責 任 者 谷脇 弘茂（藤田保衛大）

編 集 委 員（五十音順）

- 市原 学（名大） 井奈波良一（岐大）
- 加藤保夫（岐阜県産業保健センター） 後藤円治郎（住友軽金属）
- 五藤雅博（五藤労働衛生コンサルタント） 後藤義明（アラコ）
- 榎原久孝（名大） 住吉健一（旭化成富士）
- 高崎正子（東芝四日市） 城 憲秀（名市大）
- 巽あさみ（浜松医大） 寺澤哲郎（UFJ銀行）
- 長岡 芳（藤田保衛大） 松田 元（松下電工四日市）
- 松本忠雄（愛知県津島保健所） 武藤繁貴（聖隷健診センター）
- 山田琢之（名古屋労働衛生コンサルタント） 吉田 勉（名城大）
- 渡邊美寿津（愛知医大）

平成16年度日本産業衛生学会東海地方会総会（平成16年6月25日（金）「じばさん三重」）議事の内容は、下記のホームページで確認下さい。

会 員 の 異 動

新入会

愛知①青山知高（トヨタ自動車）②足立 暁（笠寺病院）③石川貴之（トヨタ自動車）④今泉宗久（小林記念病院）⑤内山集二（星崎診療所）⑥畝山常人（マキタ）⑦宇野日出男（高畑生協診療所）⑧大重頼三郎（愛知県精神保健福祉センター）⑨大野裕美（三井倉庫）⑩岡本尚子（名古屋市医師会健診センター）⑪加藤仁美（中部電力）⑫金子宏（愛知医科大）⑬九里孝義（日本ガイシ）⑭佐藤恵子（JR名古屋高島屋）⑮菅家ミサ子（キリンビール）⑯田口妙子（トヨタ自動車）⑰玉井千恵美（NTT東海健管センタ）⑱畑中陽子（デンソー健保組合）⑲松野記代子（小牧市民病院）⑳山田真理子（NTT東海健管センタ）㉑山田和美（日本ガイシ）㉒山本一仁（ノリタケカンパニーリミテド）㉓横井啓子（サンエイ）㉔齋藤 満（豊橋保健所）㉕烏山紀子（中部労災病院）㉖富岡ひとみ（農協健保組合） 静岡①杉原智恵子（生協コープしずおか）②栗田万希（松下電器産業） 三重①小森陽子（四日市病院）②河村則子（本田技研工業）③中島静花（本田技研工業）④宮村えりか（本田技研工業）⑤向井理香（本田技研工業）⑥山口しげみ（本田技研工業）⑦渡辺佐千子（本田技研工業） 岐阜①島田則子（NTN）②町野正明（土岐市立総合病院）

転 入

愛知①上原正道（ブラザー工業）②駒田裕之（ブラザー工業）③小西美智子（日赤豊田看護大）④鈴木秀樹（大同メタル）⑤八木田美保 静岡①山本千晶（ヤマハ発動機）